

『毒舌執事とシンデレラ』スピンオフ短編「夢の、その先」

少年は、イライラしていた。

色の薄い髪に、涼やかな瞳。まるで外国の人形のような、端正な顔立ち。

身にまとう真っ白なジャケットは、私立ルミナス学園中等部の制服だ。ルミナス学園といえば、日本中のセレブが集う学園。白い制服は、学園の中でも特に成績優秀な、ゴールド寮の生徒の証である。

大金持ちの御曹司で、成績もよくて、外見も美しくて。はたから見れば、何不自由なく、完璧に満ち足りた存在に思える。

けれど、彼、月森叶（つきもりきょう）は、この上なく、イライラしていた。

「月森君、オペラはお好き？ 来週末の公演、月森君の分の席も用意したのだけど。」

「都合を聞く前に勝手にチケットを取ったってこと？ それじゃ誘いというより脅迫じゃないかな。君を犯罪者にしたくないから、断っておくよ。」

「月森、乗馬クラブに入ってくれって話、考えてくれた？」

「前にも断ったつもりだけど、もしかして聞こえてなかったのかな。直接話してるのに圏外になることってあるんだね。不思議だ。」

うっとうしい誘いの数々を、今日も適当にかわしていると。

「相変わらず手厳しいですね。」

執事の森が、そう声をかけてきた。ルミナス学園では、生徒一人につき一人、執事がつ

く決まりになっている。

「叶様は言葉遣いがキツすぎますよ。もう少し優しくなさっては。」

そうたしなめられ、叶は顔をしかめた。

(そりゃ、キツくもなるさ。)

なにしろ、昔から叶に近寄って来るのは、叶のことを「新興企業・月森カンパニーの社長の息子」としか見ていないやつらばかり。見返りを期待して、おべっかを使っているのが見え見えだ。「こいつと仲良くなっておけば、将来お得だぞ。」「恋人になったら、贅沢し放題ね。」「何せ、彼は、月森カンパニーの次期社長になる男なんだから……」顔ではニコニコしていても、その目の奥には本音が見えるのだ。

聞きたくもないお世辞を聞かされたり、欲しくもないプレゼントをもらったり。果てには、ストーカーまがいのことをされたこともある。叶はもう、ほとんど疲れきっていた。

欲しいものなど何もない。ただ、放っておいてほしい。

だから、毒舌の棘をまとって、身を守る。皮肉っぽい態度も、嫌味な物言いも、相手を追い払うため。

(ああ、イライラする。)

何もいない。一人でいたい。でもときどき、どうしようもなく、空しい。

けれど、そんな日々は、中三の冬、突然終わりを告げる。

「叶様。」

執事の森の顔つきが、いつもと違った。嫌な予感がした。

森は、静かに告げた。

月森カンパニーが倒産した、と。

そして、こうも付け加えた。

責任を感じ、思いつめた叶の父が、自ら命を絶った、と。

——心臓が、凍りついた。

「叶様……いや、叶。」

森は、もはや主人ではなくなった、一人の少年に向かって、語りかける。

「気の毒だけれど、もう君に後ろ盾はない。」

つまり、誰も叶の面倒は見てくれないということか。親戚連中もずいぶん残酷だな。なんて、叶は心の中で毒づいた。

叶が色白で、髪の色も薄いのは、母が外国人だからだ。でもその母は、叶が小さなころに父と離婚して本国に帰ってしまい、今は連絡先もわからない。そのせいで、叶はずっと、父方の親戚たちから冷たく当たられてきた。母に捨てられた子だとか。一族の恥だとか。

でも、それも今だけのことだ。将来、俺が月森カンパニーの社長になれば、誰にも文句は言わせない。もう少しの我慢だ……そう思っていたのに。

まさか、こんなことになるなんて。

「ルミナス学園の高等部は諦めなさい。これから君は、自分で身を立てなければならない。」

「身を立てるって……働くってことか？ そんなこと、俺、できない。」

「やるしかないんだよ。執事の仕事なら紹介できる。」

「し、執事……？」

まさか、俺が。受け入れられず、動揺する叶。森は優しく、しかし厳しく、言った。

「私が君の後見人になろう。執事の仕事を教えるから、しっかり学びなさい。」

思えば、どれだけ厳しく当たっても叶に愛想をつかさななかったのは、執事の森だけだ。

仕事だからと言ってしまえばそれまでだが、森は森なりに、叶のことを心配してくれていたのかもしれない。叶は腹をくくることにした。もとより、選択肢などないのだ。

「……わかった。」

こうして、これまで主人の立場だった叶は、一転、執事として働くことになった。

森のもとで、見習い執事として働きながら、通信制の高校に通う日々。夏休みには、イギリスの執事学校で修業をした。もともと頭がよく、器用だった叶は、たかだか一年ほどの間に、驚くべきスピードで執事の技能を習得していった。

けれど、暮らしはもちろん楽ではなかったし、神経はすり減っていくばかりだった。

お坊ちゃまだったころも。一文なしになった今も。心はずっと、空しいまま。

(夢も希望もない。俺の人生、もうめちゃくちゃだ。)

*

心を殺して働くこと、しばらく。今や叶の師匠となった森が、言った。

「君もそろそろ、どなたかの専属執事になってもいいころだね。」

「え？ でも俺……」

「俺、じゃなく、わたくし。君は優秀だけど、その言葉遣いだけはなかなか治らないね。」

森は苦笑すると、腕を組み、少し考えた。

「君に合いそうな方が、一人いる。ちょっと変わった方だけれどね。」

数日後。森の紹介で、叶が執事として仕えることになった相手は、三田光一郎（さんだこういちろう）。一大企業・サンドリヨングループの若き重役だった。

彼は、確かに変わり者だった。

人好きのする笑顔と、柔らかい物腰。大金持ちのくせに、庶民的なうどん屋が大好きだった。しかも、「お前も一緒に食べなさい。」なんて言ってくる。普通、執事は主人と一緒に食卓を囲んだりしないのに。

もっとニコニコしなさい、なんてことも言わないし。叶がいつもの毒舌でキツイことを言っても、ムツとしたりせず、笑い飛ばしてくれるし。

変な気を遣わなくていい分、働きやすかった。

「旦那様、デスクが汚すぎです。この有り様じゃ、空き巣も驚いて逃げ出しますよ。」

数か月後には、こんな軽口も叩けるほどになった。旦那様は旦那様で、

「それはよかった。私のズボラが盗難を防いでいるというわけだね。」

なんて張り合ってくる始末。

「旦那様は減らず口オリンピックの金メダルでも狙っているんですか？」

「君ほどではないよ。」

「ご謙遜を。」

はっはっは。乾いた笑みを交わしながら、叶はデスクの上の書類の山を勝手に整理し始めた。旦那様は気にせず新聞を読んでいる。と、そのとき。

「……この手紙は？」

紙の束の中から、見慣れないものが出てきた。ポップなキャラクターものの封筒は、色ペンやシールで飾っており、明らかに子どもの字で宛名が書いてある。

差出人の名前は、灰原優芽（はいばらゆめ）。

旦那様は新聞からちらりと顔を上げ、答えた。

「ああ、娘からの手紙だよ。」

「えっ？」

叶は思わず目を丸くした。

「旦那様、お子さんがいらっしゃったんですか？」

「言ってなかったっけ。」

「だって、ご結婚されてないですよね？」

「だからって子どもがいないとは限らないだろう。」

執事は、主人の情報を完璧に把握しておくものである……師匠の言葉がよみがえる。まだまだだ、俺も。そう思いつつ、叶はその手紙を取り上げた。

「娘はずいぶん筆まめな子みたいだね。会ったこともないのに、毎月のように手紙を送っ

てくれるんだよ。」

「へえ。きちんとお返事は出されているのですか？」

旦那様は首を振った。

「書かないよ。誕生日とクリスマスにはちょっとしたカードを送るけど、それだけ。」

「どうして？」

「あまり入れ込むと、辛くなるだろう。どうせ会えないのだし。」

「会いたいなら会えばいいじゃありませんか。」

叶が言うと、旦那様は渋い顔をした。

「サンドリヨングループは、今や巨大企業だ。私が下手に関わって、娘にいらぬプレッシャーを与えたくないんだよ。」

「……………」

「その子の母親と話し合っ、そう決めた。だから、もし娘が会いに来たとしても、決して通さないで、追い払ってくれ。」

「……かしこまりました。」

それでいいのだろうか。叶はそう思いつつも、モヤモヤする気持ちを飲み込み、うなずいた。それが執事の仕事だから。

でも、手にしたカラフルな封筒を、なんとなく、手放せない。

どうしてそんなことを言おうと思ったのか、わからない。でも、気づけば口にしていた。

「あの、これ、読んでもかまいませんか？」

すると、旦那様はひょいと眉を上げ、含み笑いした。

「かまわないよ。そうだ。今後、優芽から手紙が来たら、君が代わりに読み上げてくれな
いか。最近、小さい文字を読むのが辛くなってきてね。」

「かしこまりました。」

このまえ、国語のテストで90点をとりました。ママもほめてくれたよ。でも、算数はダ
メダメだったから、おこられました。パパは算数好き？ おへんじをください。

ママとけんかした。ちらかしっぱなしでねちゃったのは、たしかにゆめが悪いけど、マ
マだって、もうちょっと早く帰ってきてくれたらいいのに。

きょう、ナナちゃんちでシンデレラの映画を見たよ。ゆめもいつかシンデレラみたいな
プリンセスになれるかな？ パパに会いたいです。

返事も来ないのに、何通も何通も、飽きもせずに日常を報告してくる手紙。一度など、
手づくりのクッキーが送られてきたこともあった。

ときに子どもっぽく悩みながらも、日々、一生懸命頑張っている優芽お嬢様。素直な言
葉の数々には、嘘も建前も感じられなくて。

なぜだろう。いつからか、優芽お嬢様からの手紙を読み上げるのは、叶にとって大事な

時間になっていた。

*

そして、冬のある日のこと。

午後の郵便物を回収しに行った叶は……、屋敷の門扉の前で、一人の少女に出会った。

寝癖のついた髪、肌にはそばかす。大きな目をした、十歳くらいの女の子。

不安そうに肩を震わせ、目には涙が溜まって、今にも泣きだしそうな表情だ。

「どうしたの。迷ったの？」

叶があわててそう声をかけると、彼女は、こう答えた。

「ゆめ、パパに会いに来たの。」

どくんと、心臓が跳ねた。

(まさか、優芽お嬢様?)

「今日、ゆめ、誕生日なの。パパに会えませんか？ この住所に住んでるんです。」

旦那様は、今は仕事で家を空けている。それに、仮に家にいたとしても、会わせることはできない。旦那様の命令に背くことになってしまうから。

だけど、このまま放っておくわけには……。

「おいで。寒いだろう。」

ひとまず手を引き、屋敷の中に連れて入る。優芽お嬢様の手は、白い手袋越しでもわか

るほど、冷たかった。いったいいつからあそこにいたのだろう。手紙の住所を頼りに、たった一人で会いに来たのだろうか。

「ここで少し待ってて。」

とりあえず客間のソファに座らせ、考える。凍えきった様子の優芽お嬢様のため、何か温かい食べ物でも出してあげたいが……。

「まいったな。シェフは買い出し中だし。」

お坊ちゃま育ちの叶は、料理ができない。せめてホットミルクでも、と、厨房で牛乳を温めて出すことにした。

「ごめんね。こんなものしか出せないけれど。」

なんて情けないんだ。明日から料理の修業をしよう。叶はそう思いながら、カップを差し出す。優芽お嬢様は、ホットミルクを一口飲むと、

「美味しい。」

小さな声でつぶやき、息をついた。叶は、ひとまずほっとしつつ、優芽お嬢様の隣に腰を下ろす。

「お兄さんは飲まないの？」

「俺はいいよ。君が温まってくれたら、それで。」

「ありがとう。優しいね。」

優芽お嬢様は、そう言って、ふにやりと笑った。あまりにも純粋な、その言葉。

その瞬間、叶は、ぎゅうと胸が締め付けられるような気がした。

だって、叶はこれまでずっと、人間関係なんかどうせ打算でしかないんだって思ってきたのだ。周りのみんなは、自分を利用したいだけだって。見返りを求めているだけだって。

でも本当は自分こそ、人間関係を損得でしか見ていなかったんじゃないのか。一度だって、森に心から「ありがとう」と言ったことがあったろうか。うわあ、嫌なやつだ、俺。

でもさっき、叶は、計算でも駆け引きでもなんでもなく、ただ素直に、彼女を助けたいと思って。そして彼女も、それを喜んでくれて。そのことが、すごく……。

(どうしよう。すごく嬉しい。)

大切な人が喜んでくれる、たったそれだけのことが、こんなに心を温かくするんだ。一人でしたら、絶対に知りえなかった幸福。

「ありがとう」という彼女の一言で、これまでの人生のすべてが、丸ごと救われるような気がして。叶の胸は、騒がしいくらいに高鳴っていた。

そんな叶の前で、優芽お嬢様はうつむき、つぶやいた。

「パパに会いたい。」

叶は、ぐっと唇を噛む。

「……俺もだよ」

叶の願いは、もうかなわないけれど。

(夢とか、願いとか、なかったな。俺、ずっと。)

欲しいものは何でも手に入る。何でも持っていると思っていたから。

でも本当は、何にも持っていなかった。叶の心は、空っぽだった。

優芽お嬢様は、小さな両手でカップを包んだまま、ぽろぽろ泣いた。

こんなにも、会いたいと思える相手がいること。それだけ大切な人がいるということ。

たとえかなわないとしても、その想いは、尊いと思った。

叶はハンカチを取り出し、優芽お嬢様のほおの涙をぬぐう。繊細なガラス細工でも扱うように、そっと。

(今、俺が望むことがあるとすれば。)

「せめて、君が幸せだといい」

自分に、その手伝い如果能したら。

翌日、叶は、旦那様の言いつけを破った。一度だけ、優芽お嬢様に手紙を送ったのだ。

十歳の誕生日を祝うカードと、ガラスの靴のペンダント。

優芽お嬢様が、キラキラと輝く未来を歩めますようにと、願いを込めて。

パパはいつでも、どんなときでも、優芽の味方だよ。

旦那様のふりをして書いた叶からのメッセージを、優芽お嬢様は受け取ってくれたら
うか？

*

「月森さん、何ボーっとしてるの？」

あれから四年。旦那様が突然の事故で亡くなり、凶らずも叶は、優芽様の執事になった。なんという運命だろうと思うけれど、旦那様の分まで、精一杯優芽様を支える覚悟だ。

「ねえ、聞ってる？」

アイアン寮の灰色の制服に身を包み、大きな目でこちらを見上げる、優芽様。

気が弱くて流されやすく泣き虫で、でも、大事なところで驚くほど強い。失敗しても、落ち込んでも、めげずに食らいつく。大切な大切な、お嬢様。

「ボーっとしているのは優芽様のほうでしょう。いったい何度注意すればタイを真っ直ぐ結べるようになるのですか？ 優芽様の世界では常に地面が十五度傾いているのですか？」

「う。」

「それから、今日の放課後は英語の再テストですからね。解答欄を間違えて赤点など、信じがたいポカです。目を開けたまま寝ていたとしか思えませんね。」

「わあん、反省してます！ 再テストは絶対満点取るから！」

「よろしい。それでこそわたくしの優芽様です。」

「わ、わたくしのって……や、嫌じゃないけど、その、えっと、ほら、もう行くよ！」

少し照れたように小走りで駆け出す背中。叶は口元に浮かぶ笑みを手で隠した。

あの日のことを、優芽様はきともう、忘れてしまっただろう。

でも、あの日たしかに、彼女は叶を救ったのだ。夢も希望もなかった叶の人生に、生きる意味を与えてくれた。彼女こそが、叶の夢なのだ。

王冠をかぶってしようが、灰まみれだろうが。彼女は叶のシンデレラ。だから、

「どこまでもお供いたしますよ」

少し後ろから、見守っているから。優芽様はどうかその手で、未来を切りひらいて。

キラキラ光るガラスの靴で、一步踏み出して。夢の、その先まで。

